

つかもと長者

むかしむかし、馬うまを使つかっていわきの浜はまから塩しおをはこび、たくさんの使用人しようにんと塩しおぐらを持ち、この地方ちほうの塩しおの供給元きょうきゅうもととして大変たいへんあがめられ、何なに不自由ふじゆうのない生活せいかつの、つかもと長者ちやうじやとよばれた富豪ふせうがおりました。しかし、この長者ちやうじやにもひとつだけ悩みなやみがあり、それは子供こどもがないということでした。

ある時とき、一人ひとりの旅たびの行者ぎやうじやがおとずれ、「あなたがたは、長年ながねんの間あいだ、馬うまをこく使ししたので、そのたたりで子供こどもがさずからないのだから、観音かんのんさまを信しんこうするように。」といわれ、長者夫婦ちやうじやふうふは子供こどもほしさに、観音かんのんさまに毎夜まいよそろっておまいりし、「どうぞ子供こどもをおさずけください。もし、さずかったならば、われわれのうちどちらでも、四年ねんたてば一命いちめいをたたれてもかまいません。」と、悲願ひがんのちかいをたてました。やがてそのかいがあつてか、玉たまのような女おんなの子こが生うまれ、長者夫婦ちやうじやふうふの喜びよろこぶようは、たとえば